

「底が突き抜けた」時代の歩き方 104

ユダヤ人はどうして迫害されるのか

ノンフィクション作家のクライン孝子が『SAPIO』(00.6.14)に、「先進国、とくに欧米諸国から日本人は歴史認識に恐ろしく欠落している民族であること、それゆえ国際センスの面で`ズレている`という不名誉な評価を頂戴し、カヤの外におかれて久しい」と書いている。私もそう思う。ドイツ在住の彼女からすれば、このことは我が身に刺のように強く突き刺さってくる問題であるのだろう。だが、日本人の歴史認識の欠如は歴史を学ぶ、あるいは歴史から学ぶ姿勢の欠如からやってくるのであり、その欠如は我々日本人がどのような存在であり、どこからやって来てどこへ行こうとしているのか、という問いの欠如と重なり合っている。要するに日本では、人間というものは深遠な存在ではなくなりつつあるのだ。

自国の歴史についてすら無知と厚顔が罷り通っているのだから、彼女が「一体どれぐらいの日本人が『ホロコースト』という言葉を理解しているのだろうか」と問うても、今の日本人にはほとんど伝わらないだろう。規模こそ違え、戦時中の日本が「ホロコースト」的感覚とけっして無関係ではありえなかったにもかかわらず、今の日本人にとっての「ホロコースト」は、映画やテレビで時たま見かける映像シーンにしすぎなくなっているからだ。「確実に言えることは、この『世界の常識』は日本では『知らなければ恥』と考えられるほど浸透していない」と彼女が続けて書くとき、このことを知らなければ、生きていく値打ちがないと思われるようななにかが、あなたにはありますかという問いかけを、一人一人の日本人にむかって思わず発したくなってくる。

彼女の文章で興味深いのは、「キリスト教徒によるユダヤ教信徒の弾圧の歴史」の2000年について、概略的に俯瞰していることである。「そもそもユダヤ人迫害のルーツはローマ帝国においてキリスト教化が始まった4世紀前半に遡る」と彼女は書き始める。4世紀後半のキリスト教の国教化に伴って、「ユダヤ人はキリストを十字架に掛けた張本人で、それゆえ神から永遠に呪われる民」とされ、「祖国なき流浪の運命」を負わされるが、ユダヤ人が苦悩の途の拠り所をユダヤ教の信仰に求めたために、迫害はますます強まっていく。「最初の組織的なユダヤ人迫害は、十字軍遠征が始まった11世紀末頃で、このときユダヤ人の村はキリスト教徒の餌食となっていてことごとく略奪や殺戮に遭っている。」

ユダヤ人といえば、シェイクスピアの『ヴェニス商人』に登場する金貸しのシャーロックがすぐ思い浮かぶが、彼女は金貸しは、「実はユダヤ人の本意ではなかった」として、その背景を次のように説明する。1215年、欧州で開かれたキリスト教会によ

る「ラテルノ宗教会議」で、ユダヤ人とキリスト教徒との強力な隔離政策が打ち出されたことによって、「ユダヤ人は公職からの締め出しはもとより、ほとんど全ての職業からシャットアウトされてしまったのだ。と同時にこの会議ではキリスト教徒の間で利息を取って金を貸すことを禁止した。そこでユダヤ人は異教徒であるが故に教会法に触れずに済む金貸し業に従事するしかなくなった。つまりユダヤ人にとって金貸し業は止むにやまれぬ選択だったのである。」

キリスト教王国のなかで、異教徒として暮らすことがどれほど苛酷であるかは、`いじめ`が凄まじい日本の社会からは容易に想像できるが、その上に当然キリスト教文化と異なるユダヤ教文化が加わり、更に世俗上での職業の問題までが申し掛かってくると、ユダヤ人迫害が欧州各地で、「日常茶飯事化しエスカレートしていく」のが手に取るようにわかってくる。だが、1789年のフランス革命後の「人権宣言」は、アメリカ合衆国独立の際の、「ユダヤ人にも対等の平等権」に倣い追随して、ユダヤ人迫害に歯止めを掛けようとしたが、ただちにユダヤ人の解放につながることはなく、「ドイツやオーストリアではナポレオン戦争がもたらしたユダヤ人解放令も、ナポレオン勢力が衰えると元の木阿弥になっている」。

歴史的にみて、最もユダヤ人を迫害したオーストリアの祖「ハプスブルグ家」とプロイセン王朝が、第一次世界大戦敗北後に崩壊し、「ワイマール憲法」が成立したドイツでユダヤ人は対等に扱われるようになったが、世界で最も民主主義的といわれたこの「ワイマール憲法」も、ベルサイユ条約での敗戦国に対する過酷な賠償と敗戦後の混乱、貧窮の中で矛盾を一挙に拡大させて、ヒトラーのナチズムの台頭を許すことになった。戦勝国に対するドイツ人の不満、怒りをユダヤ人へと向けさせることに成功したナチズムは、史上最大の「ホロコースト」へと手を染めていったのである。

ユダヤ人迫害に関するこの歴史的記述の大半は、クライン孝子の文章に基づいていることを付記しておく。以上の歴史的経過から、ナチズムによる「ホロコースト」は2000年に及ぶキリスト教徒によるユダヤ人迫害の歴史の集大成の位相にあるのがわかるだけでなく、したがって戦後のイスラエル建国も、2000年の迫害の歴史を射程に入れた「ホロコースト」との関連で捉えられなければならないことに気づく。

また彼女は、ドイツでネオナチの台頭に敢然と戦いを挑んだユダヤ系ドイツ人が国際世論に支えられて、94年9月21日に「ナチ支配のもとで行なわれた民族殺戮のような行為を、公共の平和を乱す形で公然とまたは集会において容認したり、事実を否定したりあるいは矮小化した者は、5年以下の自由刑または罰金刑に処せられる」とした、「アウシュヴィッツのうそ」取り締まり強化の刑法（第130条と第131条）を可決したことや、00年3月12日、ローマ法王ヨハネ・パウロ2世がカトリック教会史上初の謝罪を行ったことにも触れている。「この日法王はキリスト生誕2000年を記念する大聖年にちなみ、バチカンのサンピエトロ広場でミサを行なった。その中で、『歴史上、あなたがた（ユダヤ人）の子どもたちに苦しみを与えてしまった人々の行為を深

く悲しむ』と語り、カトリック教会がナチスによるユダヤ人迫害を事実上容認したこと、11世紀末から約200年間にわたって繰り返された十字軍遠征時の残虐を謝罪し、異端教徒弾圧を理由に行われた宗教裁判を巡っても『カトリック教徒の名誉を汚した手段と行為』として赦しを求めている。」

歴史への無関心は現在（の出来事）への無関心につながり、現在への関心は必ず歴史への関心を掘り起こしていく。「恐らく日本人には、こうした2000年にもわたるキリスト教徒とユダヤ教徒の宗教戦争にユダヤ人が翻弄され続け、遂にその恨みを法王の謝罪によって晴らしたという現実には想像もつくまい。だが、これこそが世界の潮流であり現実であり、だからこそ歴史への回帰が必要なのである」と彼女がいうとき、本当は日本人は歴史認識の欠如である以前に、歴史に対する責任感の欠如というべきかもしれない。世界の歴史を学ばない日本人は、世界の歴史から孤立していく日本人になることは今更いうまでもない。

2000年9月17日記